

「明けるまで Lofi」

—2 稿—

2025/8/15

雨森 れに

〈人物表〉

崎山 圭 さきやま けい

(30) 会社員

榎谷 朱里 えたに あかり

(30) 圭の幼馴染。デザイナー

1. コンビニ・駐車場（夜）

深夜。マツダのロードスターが停まっている。

車に寄りかかり煙草を吸っている榎谷朱里（30）。

タイトなミニワンピースを着ている。

のんびり歩いてくる崎山圭（30）。

Tシャツに半袖シャツを重ね、デニムを履いている。

圭 「よお」

朱里 「ん。アイスコーヒーね」

圭 「へえへえ。ブラックな」

朱里 「サンキュー（煙草を消す）」

朱里が車に乗り込む。白い脚がゆっくりと車内へ。

圭、脚を見て固まる。

ドアの閉まる音で我に返り、慌ててコンビニへ。

2. 車内（夜）

高速道路のETCを通る。

アイスコーヒーが二人分、ドリンクホルダーにある。

圭、コーヒーに手を伸ばす。

朱里の太もがむき出しになっていることに気づく。

朱里 「なんか音楽かける？」

圭 「へっ？」

朱里 「へっじゃないよ。最近どんなん聴くの？」

圭 「あ、ああ。（コーヒーを戻して）最近のはあんまり……」

Lofiの作業BGMとかは聴いてるけど」

朱里 「生意気にもチルってんだ」

圭 「むかつく言い方すんなよ」

朱里が車の音楽プレイヤーを再生する。

Lofi調の音楽がかかる。

朱里 「私もチルってるから一緒だねってこと」

圭が座席に沈み込む。呆れたように。

会話が途切れ、音楽が揺蕩う。

圭が、朱里の太もをちらりと見る。

圭 「あのさ。服。どうした。きわどいじゃん」

朱里 「あー」

圭 「いつもジーンパンにTシャツだったのにさ」

朱里 「全部捨てちゃったんだよね」

圭 「は？ なんでよ」

朱里 「もうテキトーな服を着てちゃだめだなんて。あ、サービスエリア寄ろうよ」

3. サービスエリア（夜）

観光地近くのサービスエリア。

圭、顔はめパネルで変顔。それを撮影する朱里。

ふたりは追いかけてっこをしながら室内へ。

× × ×

食堂。圭と朱里がうどんを食べている。

朱里が七味をかける。蓋が落ち、大量の七味がうどんの中に。

圭が大笑いする。

つられて朱里も大笑い。しかし、一瞬笑顔が陰る。

4. 車内（夜）

サービスエリアを離れ、走行中。

朱里 「あー、まだ辛い」

圭 「まさかの完食だもんなあ」

朱里 「腹が減っては戦ができぬ……あれ見て（外を指さす）」

5. 高速道路（夜）

路肩で車が停まっている。

男女がエンジンルームを覗いており、会話している。

6. 車内（夜）

朱里 「意外と女のほうが直せたりして」

圭 「ありえる。ここにもそういう奴いるし」

朱里がにやりと笑う。

朱里 「よっぽどのことじゃなければいけるね」

圭 「デザイナー業界って、車が趣味なやつ多いの？」

朱里の笑顔がぎこちなくなる。

朱里 「バイクの多いかも。圭は？ 最近乗ってないの？」

圭 「売っちゃったんだよねー」

朱里 「ええ？」

圭 「時間ないし。移動も電車があればいいじゃん」

朱里 「もっと頻繁に会うべきだったかあ」

圭 「説得しようとすんな」

朱里 「したかったよ。あー、もう」

圭は悔しそうな朱里を見て、微笑む。

圭 「時間ないくせによお。有名になったらうまい飯おごれよ」

朱里 「うまい飯目当ての応援？」

圭 「当たり前。……それなりのなら俺が誘ってやるよ」

朱里、ちらりと圭を見て、

朱里 「いつも断ってばっかでごめん」

圭 「いいって。チル、すつか」

圭の指がオーディオの音量をあげる。

朱里は答える代わりにアクセルを踏む。

車のエンジンが唸る。

ふたりが見ているのは、延々と続く夜の高速道路。

オレンジ色の道路照明が流れていく。

沈黙の中、コーヒーだけが減っていく。

7. 車内（早朝）

コーヒーが空になっている。

圭が眠そうに船を漕いでいる。

朱里が圭の額をはたく。

起きた圭に対し、外を指さす。

8. 高速道路（早朝）

海が見え、朝陽の気配がする。

9. 駐車場（朝）

海沿いの駐車場。

圭と朱里は、堤防に肘をついて、海を眺めている。

朱里、圭に向き直る。

圭からは逆光になり、朱里の表情が見えない。

朱里 「あのさ。私、来月から、韓国なんだよね」

圭 「は？ 韓国？ いつまで？」

朱里 「契約上は3年。でも、更新するかも」

圭、動揺してすぐに言葉が出ない。

太陽は明るさを増し、朱里の輪郭を更に輝かせる。

圭 「えっと、それはさ。なんていうか……夢を叶えたってこと、だよな？」

朱里が頷く。

圭 「そっか。そうだよな。うん。よかった。ずっと韓国行きたいって言ってたもんな。お前、すげえよ」

朱里 「（鼻声で）うん」

朱里、圭に背を向ける。

10. 車内（朝）

海沿いを走行中。圭が運転している。

朱里の膝には圭のシャツが乗せられている。

圭 「この辺、アジフライの店あったよな」

朱里 「行列できるとこね。いいじゃん」

圭 「お前、胡坐かくなよ」

朱里 「この服装でできるわけ」

圭 「てか。ラクな服捨てたって、こういうこと。わかんないんだけど」

朱里 「ブランドの方針。外出時は気を遣え。ラクを着るな。ラフを着こなさせて」

圭 「そんなん車のメンテできねえじゃん」

朱里 「だからこの車、アンタに任せるつもり」

圭、路肩に車を寄せる。

圭 「何言ってるの……」

朱里 「売るのも嫌だし。あ、駐車場代は私出すよ」

圭 「いや、そういうのはさあ」

朱里 「（縫りついて）圭しかないんだって」

圭、目元を押さえ、天を仰ぐ。

朱里 「たまに乗ってくれれば——それ以上は望まないから」

圭 「ちょっと黙ってて」

圭が深呼吸をする。

朱里の目を見て、

圭 「付き合う?」

朱里 「へっ?」

圭 「へっじゃないよ。だってそういう流れじゃん。最後のド

ライブ。車任せる。もうこれ、俺が告白しなきゃじゃん」

朱里 「いや、深い意味はなかったんだけど……」

圭、驚きの表情を浮かべる。

じわじわと恥ずかしくなり、外に出ていく。

朱里 「ちよっと!」

11. 道路（朝）

車から距離を取る圭。

追いかける朱里。

朱里 「ちがう! 今のナシ!」

圭 「氣イ使うなって! 余計恥ずかしい!」

朱里 「ちがうって! フラグじゃないけど、前向きに」

圭 「だから、そういうのが――」

圭、朱里にTシャツを掴まれる。

朱里 「（背中に手を置いて）とりあえず、聞いてよ」

圭 「（背筋を伸ばす）お、おう」

朱里 「私、韓国行くし。年齢もアレだし。話し合うこと多すぎるじゃん」

圭がゆっくり振り向く。

圭 「腹が減っては……だよな」

圭、朱里の手を取り、車へ向かう。

12. 定食屋・外観（朝）

のぼり旗がいくつか立っている。

店前には駐車場。ロードスターが停まっている。

おわり